

ヘボンと共に

—研究所での二年間を振り返って—

佐々木 晃

旧本館二階の薄暗い研究室での生活は短かった。五月には竣功成った本館九階北ウイングの明るい研究室へ移転。やがて眼下に見下ろす旧二号館が取り壊されて、新しい建物の建築が始まった。地下三十数メートルと言われている基礎杭打ちから建ちあがり、早くも翌年十二月には献堂式が行われた。瓦屋根に残照を映し、西の空を茜色に染め、一日を燃え尽くして太陽が今日も沈んで行く。過ぎ去った時間の中に自らの歩んだ足跡を振り返る時が来た。今日一日、その積み重ねの果ての過去二年間を。

私のヘボン研究は遅々として捗らず、研究発表も、研究論文も、どれ一つ光彩を放たず、不完全燃焼のまま道程を終わる。キリスト教研究所の所長加山久夫教授、ヘボンプロジェクトのチーフであった久世了副学長をはじめ研究所員の方々には甲斐性のない研究員であったとの印象をのみ残して。ヘボン館の向こう側にあるチャペル、記念館、創立百二十周年を記念して修復されたインブリー館の建ち並ぶ懐旧の一角は研究所の窓からは見えない。ヘボン館を境にしてこちら側に建てられた新二号館を眺めながらふと思う。創立以来一世紀以上を経た明治学院が新しい世紀を真近に控えて試みる「素朴で住宅的な佇まいの教育環境」と

言う発想は、世紀末の時代に精神革命の必要性を問い掛けようとする心の表われなのだろうか。

古い物を残し、既存の建築群との連続性を重視しながら、新しい物を創る新旧融合の美、それは同時に苦難と栄光の歴史に、不安と期待との未来を繋げて、更に歴史を積み重ねようとする心の表われなのか。

ヘボン胸像の背後に未来の明治学院の歴史が展開しようとしている。開国当時、福音の種を蒔くために遙々大洋を超えて来日し、宣教の先駆者としてその偉業を称えられ、明治学院初代院長の座に就き、激しい時の流れに弄ばれながら、辛くも学院の象徴として語り伝えられてきた宣教医ヘボンを過去から呼び起こし、「親しみを求めて近寄り、その内奥に潜む人間らしさに触れたい。襟を正し、正面から仰ぎ見ていた自らの位置を変えて、先人達の拵えた理想のヘボン像の後ろに廻り、視点を変えて眺めてみよう。」意気込んで始めた研究の矢は未だ的を射ないうちに吹く風は冷たくなってきた。

誤解を恐れずに敢えて言うことが許されるならば、ヘボンプロジェクトの研究員としての身分ではあったが、ヘボン研究の指導者との邂逅の機会には恵まれなかった。共同研究する仲間もいなかった。

「ヘボンの明治学院なのに何故」という疑問が時折鬱勃として湧いては胸中を過ぎった。「そのための研究員さんじゃないですか」図書館の運用係の青年がぼつりと一言口にした言葉は今でも忘れられ

ない。では「孤独で刺激のない研究生活だったか」と問われれば、「否」と答えるのに躊躇はない。四十数年の教員生活の後に、思いがけず自由に研究出来る贅沢な時間が与えられたこと、残された僅かな人生の道程に学究の標柱を立てることが出来たことへの感謝の思いに満たされているからだ。一抹の寂寥感を抱いて去ろうとする今、敬愛する加山先生を軸とするキリスト教研究所への尽きない愛着と共に、研究所での二年間を振り返って、心に刻まれた事の数々を思い返してみる。キリスト教研究所開所三十周年、学院教会の誕生、"Hepburn Family"を合い言葉に祝われた学院創立百二十周年、加山キリ研所長の交代—歴史の節目を象徴することの多かった二年間、思えば一陣の風のように吹き去った時の流れであった。心地よい雰囲気の中で思う存分研究が出来るようにと、笑顔で励まし、細かく心を配って下さった副手の岡村さん、信仰に燃え、研究熱心な同僚の三川研究員、齋藤主任をはじめ所員の先生方や図書館の方々に、感謝の思いは尽きない。明治学院と、キリスト教研究所に主の恵みが豊かにあるように祈りつつ。

(ささき あきら

キリスト教研究所研究員)